

語り継ぐ

沖縄県立読谷高等学校二年 兼謝名 彩音

みなさんは身近に戦争を語ってくれる人がいますか。私は、三年前に去ってしまった曾祖父からよく話を聞いていました。曾祖父は戦争の話聞かせてくれる度に涙を目に浮かべながらつらい経験を話してくれました。

「おじいちゃんね、パイロットになりたかったさー」

いつも話してくれる前にこの言葉を必ず言っていました。私の曾祖父は、パイロットになりたくて、沖縄県立工業高校に入学しました。しかし、二か月が経ったころ、いつも通り家を出て学校に行くと、突然身体検査をされ、家へ帰る間もなくそのまま戦場に入り出されたそうです。そして、学校の先生から無線通信機と銃をわたされ、首里城近くの三十二軍の部隊から沖縄戦に参戦したそうです。その話を聞いた時、もし私が同じ立場だったらと考えたら、とても怖くて胸がはりさけそうな気持ちになりました。しかし、体験者が減ってきている中、今私たちには何ができるでしょうか。戦争で命を奪われることのない世界をつくるにはどうしたらいいのでしょうか。それは、今だけを見つめるのではなく過去の過ちをくり返さないために過去と向き合っていかなければいけないと思います。

曾祖父の経験は想像を絶するものでした。

「おじい、無線機を使って司令部に連絡するのが役目だった。無線機は米軍に見つかると攻撃の的となり、一発で死んでしまうからとても必死だったんだよ。大きな爆音と共に泣き叫ぶ人たちの声が、今でもおじいの耳から離れないさー。おじい、砲弾が飛び交う中、糸満につくと必死で摩文仁の絶壁を登り、後ろをふり返ってみると、海には見えないほどだった。絶壁を登りきった時、攻撃され、爆弾の破片が足にささって気を失ったところを収容所に連れていかれた。おじいが見た戦争は地獄だったし、大切な友人も失ってしまったさー。」

爆弾の破片がささった後、後遺症が残り曾祖父の足はずっと不自由でした。

七十年以上も前のことをはつきりと覚えていたのは、私たちが想像する以上に悲惨でつらい体験だったからだと思いました。苦しうに話をする曾祖父は、私たちには想像する事のできない傷と悲しみを背負っていたのだと感じました。それは、普段明るく笑っている曾祖父とは反対に見たことのない、強ばった表情で話していた姿を今でも忘れません。人と人が憎しみあう戦争で得るものは何もないと思いました。

「おじい、ね、本当は忘れてしまいたいほど苦しい。沢山の命が奪われ、家も焼かれて何も残らない。とてもくやしかった。でも絶対に忘れてはいけな」と思った。亡くなってしまった友人のためにも、未来のためにも、こんな悲惨なことは二度と起こしてはいけません。」

戦争を知らない私たちだからこそ、戦争の中を生き抜いてきた人たちの、全ての思いを引き継がなくてはなりません。私の曾祖父は亡くなってしまいました。書き表していくうちに、涙が溢れ出てきました。戦争を体験した曾祖父が私たちに伝えたかったこと。それは、「命を大切にし、同じ過ちをくり返さないでほしい。」その思いを私もずっと伝え続けていきたいと思っています。

おいしいご飯が食べられること、温かい布団で眠れる今。当たり前のように見えるものだけでなく、心で感じるものだからこそ、相手を思いやることが大切なのです。曾祖父は「戦争は人を殺し合うことで勝ち負けが決まる。でも命より大切なものは、おじい、見たことがないさー」と、言っていました。今、幸せを感じる事ができるのも、涙を流したり、笑ったり、悲しんだり、思いやり、すべてが命あってこそなのです。

今、私たちができること。あなたは何だと思えますか。私は相手を思いやることから始めていきたい。そして戦争の悲惨さを知った私たちが語り継ぐことで平和が守られていくと信じています。